

光明 第五卷第十一号

師走雑感

年末

山県郡の奥でお炬燵にあたりながらペンを持つ。

手水鉢の水に薄氷を見る。家の屋根、畑の大根葉、垣の側の黄菊の上には、真白い霜が雪のように朝日に輝く。

冬が来た。淋しく木の枝に残る紅葉、紅に染った柿、秋は凋落のどん底に沈んで何となく涙ぐましい悲哀に打たれる。

大正十二年は間もなく去る。

苦しい一年だった。思い出多い一年であった。多忙な一年であった。変化に富み強烈な刺激に充ちた一年であった。けれども私の一生にはなくてはならぬ貴重な一年である。ただ感謝する。じっと眼を開いて全てを思い浮べると、身も心もひきしまる。そして感謝する。けれどもこの多忙な悲壮な幸福な大正十二年は去るのだ。時の早く去る淋しさ。

誠に本年は私の手には常に苦杯が握らされてあった。手に持つ杯には次々と苦き酒のみななみとつがれてあった。千仞の谷底にも落ちた。滔々たる濁流の波のまにまに流れもした。そうしてとにかく十二月にたどりついてほっと息をつぐと、もう本年は去るのだ。

苦痛逆境は人を育てる。

もし逆境でくたばれたら、逆境で人は殺される。

もし逆境のどん底に、立ち上り立ち上り進むなれば、逆境は人を作る。

苦しみ、淋しみ、貧しさ等、それらは全て人の嫌がるものである。けれどもそれほど尊いものはない。天才と凡人との選択はここでつけられる。

逆境は天才を躍上らせ、凡人をひき落す。

苦しい内に立って、跳上ったものだけがどんどん進んでゆく。

私は私のこの一年の内に寄せて来た大波小波の内に、とにかく、進んで来たことを嬉しく思う。どんな人間苦の中にも、私をして立上らせた力はただ念仏であった。

我が泣く時、如来は我の内に泣きたまう。

我が苦しむ時、如来は我の内に苦しみたまう。

我が悦ぶ時、如来は我が内に悦びたまう。

我が身心のどこ、微塵の内にもしみつきたまう如来は、我と共に起き、我と共に寝ね、我と共に働き、我と共に叫びたまう。

万人悉皆、私の本当を見てくれない時、我の全部をそのままに、飾らず、偽らず、ありのままに見たまひて、

悪しきを叱り、善きをほめ、

正しさを慰め、悲しさを励ましたまうもの、ただ彼、如来のみである。

我は如何なる迷路にわけ入るとも、必ず、我に來りて、離れたまはざるは彼如来である。

我は世の不急の小問題に頭を入れて、いわゆる、蝸牛角上に事を争うの時、我は忘るゝといえども忘れたまわざるはただ如来である。

かくして如何に苦しき時にも力強く苦しませたまひ、如何に悲しき時にも心おきなく泣かしたまひ、我をして不退に生かしたまひはただみ仏であつた。

愛の世界に

刃をくぐつて、火の中を過ぎて、恵まれたる法友を、あの山の蔭にたづね、あの谷の間に求めて、淋しきを慰め、苦しめる方と如来の慈光に蘇りつつ生き得たその間には、涙ぐましい愛情が私を力づけてくれた。

呪阻、悪罵、争鬭、反逆……、それ等のうちを、たった一人で苦しい旅を続けるその姿の上には、常に心からなる法兄法姉たちの温い涙が注がれてあつた。

眼を閉じてじつと一ヶ年を回顧する。

私はペンを投げて心を瞑想、連想にまかせる。

何時のほどにか涙の子になつてしまふ。

愛の世界にでなければ生きられぬ。

ありがとうございます。ありがとうございます。

私は謹んで有縁の一切同胞にこの至情、満腔の涙を捧げる。

大地の上にとつた一つの与えられたる、人と人とを繋ぐ力はただ愛である。信である。家庭の内にもただ愛の血が通つてのみ生きているのだ。

村も国も、愛の実行者によつて生きる者の幸福が与えられ、浄化され、美化される。

愛でなくちゃいけない。愛の世界にでないと生きられぬ。

私は愛せられた。涙の世界にたつた一人逍遙せねばならなかつた私には、何時も誰かによつて、涙ぐましい、情の世界に生きることをゆるされた。

人間は経済的な動物である。物質の上に立つた時、皆、貪欲、瞋恚のあさましい久遠の本性の上に立つ。そうして争鬭の世界になる。

念仏の行者には必然に温い愛の世界が与えられる。

どうしたのだろう。真から信仰の人に接する時、一回出会つても十年交友の知己となる。知る者だけはこれを知る。

み仏の前には、上もない下もない。ただ同胞である。

私は幸福である。この一年まことに私は苦しかった。けれどもいつも、どこでも、誰かによつて愛されて来た。極端に悪まれる者は極端に愛せられる。

私はいく人も人を愛しない内に、人からはむやみに愛せられて、深い呪いの世界と深い愛の世界とを味わつて来た。

真に人生は愛せらるべき世界である。

極悪非道の死刑囚の上ですら、彼が死に就かんとする前には人間愛の涙と、法の慈涙とがそそがれる。

人は愛せらるべき者である。月の空に輝くかぎり、陽の東に輝くかぎり、地上は永久に愛の世界である。愛の世界は生くべき世界である。人の眼の底には涙がしまわれてある。ただ人の世の煩惱の冷たき風は、その涙の流れ下ることを妨げる。その涙を凍らせる。

信仰とは内なる光によつて、その氷を解くことである。

人を自然の涙の子にすることである。温い人にすることである。

法蔵菩薩は十方衆生の苦悩と、迷いとを見て泣きたもう。

十方衆生の泣かねばならぬ業苦はそのまま法蔵の涙である。

念仏の行者は菩薩である。十方衆生総てに流れる法蔵の血涙に蘇つて、法蔵の涙を我が涙とせる人である。真実の愛を実行せんと念願する人である。

もし全人類が法蔵の血涙に蘇つて、自然に流れ出づる涙をわが小我のはからいによつてとどめることなく、本当の人として誕生するならば、地上は如何に美しいう。

心に仏を憶う、これ念仏である。三毒の胸の内に開く心蓮華、それは如来廻向の真実である。念仏によつて手を握るとは、真実によつて手を握ることである。何で温くなくてよからうぞ。

私は泣いた。苦しんだ。けれども至る所に真珠のような念仏行者が見出される。

その方々によつて私の涙を感謝の涙にまで変えさせられた。

幸福でなくて何であろう。

議論ぬきの世界

ほんと言えは議論は議論で打ち砕かれる。理屈は理屈で壊される。

私は議論ぬきの世界に合掌する。

極重悪人が一夜彼の一切に気がついて、懺悔の涙にぬれた時、彼の全霊に火がついて、念仏の行者となる。そこは議論ぬきの世界である。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおほせをかうぶりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。念仏はまことに浄土にむまるゝたねにてやはんべらん。また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもて存知せざるなり。」

それは、議論をぬきに涙を通して、ただ落ちねばならぬ者の、有無を超越えた世界の風光である。

三津浜から高浜に向かう汽船の船室には二人の熱心なクリスチャンが私の前と横とに坐つていなさる。私の一言一行をも見のがすまい、聞きのがすまいとして船が高浜につく。今一度に着いた汽車から走つて棧橋に来られた一人のクリスチャンの方、三人は雨の棧橋に立つて船の出るのを待つ。船は動く、手をさしのべて、一語もかわす暇なき法友と握手する。船は動く。私はただ感激して涙しつと合掌念仏する。船と陸は次第／＼に遠ざかる。雨の中に立つ三つの黒点はやはり動かぬ。私はただ合掌する。影は見えぬ。人はわからぬ。棧橋も見えぬ。やがて高浜も見えぬ。四国の

天地のみ、残る。私は四国の天地に合掌する。議論のいらぬ世界、この事実の前に何の議論が間にあおうぞ。

継母に愛されざる姉妹、夜そつと家をぬけて、墓場に至つて、苔の下に冷たく眠る母の墓石の前に、

「母様母様、何故早く死んで下さいました。お母様お懐しうございます。お母様、私たちは苦しいございます。」

顔をも知らぬ母を恋うて、小さき石を拝む二人の子を見て、閑人よ、言うことなかれ。石を拝むと。

ある人愛児を失う、来る日来る日、小さい衣服をとり出して、目に涙をたゝえて、ありし昔をしのびつつ、死せし子の魂の行末を思う。人の体は死して腐る時、それぞれ炭酸、水、窒素の元素にかえる、魂などあるものかという理屈はこの場合何にもならぬ。

議論ぬきの世界から信仰が生れる。信仰は議論では生れて来ぬ。

愛や、慈悲の世界にも議論は駄目だ。

涙に飢えた者に、議論を教えるのは、腹の空になつた者に石礫いじろをやるのと等しい。

罪に泣く子はないか。人生の淋しい子はないか。

物質文明に愛想をつかした子はないか。

兄よ。姉よ。

おん身たちはどこのはてにさまよつて行く。議論ぬきの門に立て。そして、人生最後の殿堂にかけこんでゆけ。そこには、汝を生かす涙の泉がある。法蔵のみ胸から湧き出して来る。

議論はこの殿堂の鍵ではない。

最後の厳肅感

最後という言葉ほど人の胸に厳肅な感じを与えるものはない。

最後に立つた時ほど人の胸に神々しい感じを与えるものはない。

これが親子一生の見納めだという時には如何なる悪人でも涙の人となる。

私は七月には、「これが学校教育の最後だ」と、教壇に立つ最後の悲痛な厳肅な気分を味わねばならなかつた。

十二月五日の朝、私は祖先の墳墓に立つた。下には私の一家、隣家、そして一郷の方々が見下される。冷たい霜をきて、祖先の墓が大小取りまぜてならんでいる。

私の一家は、今日、数十年住みなれた故郷を去つて広島に移るのだ。老いませし父母と、いとしき弟妹たちをつれて、故郷を後にする私は、今、静かに合掌している。

生活が苦しいから故郷を去るわけでもない。都会生活をあこがれるわけでもない。私は一家の中心であるけれども、度々故郷の老父を訪うにはあまりに忙しい体である。しかるに両親は老い行くままにただ私を杖とも柱とも思つて生きている。私は

私の自由なる活動を欲するために、老いたる両親に一目でも安堵した生活をさすために、家を閉ぢて、今朝、出ることにしたのだ。

祖先の墓に合掌すれば、万感胸に浮ぶ。祖先は我が全霊に生きたもう、祖先がはたさんとして果し得ざりし全てを揚げて立たねばならぬ子孫である。

幾十百万の親、それはわが背後に立つて、私の力となり、我を護りたまう。

祖先墳墓の地を去る、その朝、私の胸はただ深い哀愁と、感激と、発奮に充ちて来る。静かに「光顔巍巍 威神無極……………」

嘆仏偈を捧げる。その最後「仮令身止 諸苦毒中 我行精進 忍終不悔」

(たとえ身を諸の苦毒の中に止くとも、我が行は精進にして、忍びて遂に悔いじ)

幾回となく口の内にくり返しつつ合掌すれば、祖先は総がかりにて我を讃め、我を護りたまう気がする。

「たとえ身を諸の苦毒の中におくとも、我が行は精進にして、忍びて遂に悔いじ」とは、法蔵が十方恒沙の諸仏に向つて、彼が説かんとする大誓願に対して彼自身の大決心を宣べたものではないか。

一切衆生の全苦悩を背負つて立つ法蔵の大信心であり、大決心であり、誓いであり、念願の最高潮ではないか。彼は、如何なる火の中、水の中、地獄の中、毒の中、何の中へでも身を捧げて、十方衆生救済の大願成就のために、法蔵彼自身を完成するために、永劫の旅に出たではないか。「仮令身止 諸苦毒中 我行精進 忍終不悔」この強い叫びは、今も彼法蔵の大願であり、信心である。

私は今、祖先の墓に立つて「仮令身止 諸苦毒中……………」法蔵が十方衆生を背負つて十方恒沙の諸仏に、「願を発して、彼に所欲を力精せん。十方の世尊、智慧無碍なり。常にこの尊をして我が心行を知らしめん。」と念じて、奮い立った如く、私も故郷5を後に、祖先を後に、諸の苦毒の充ちた都会の地に、家庭を捧げて飛びこまねばならぬ。

彼法蔵は諸仏に向つて、勸、讚、證、護を求めた。諸仏は法蔵の大誓願を遂行することを、勧め、讃め、證し、護らねばならぬ。第十七願がそれである。そうして一切諸仏の威神力はそのまま法蔵の力となつて、一切衆生に向かつて第十八願を説く。十八願は一切衆生救済の大願である。

私は今、幾十百万数量の祖先に対して、その勸、讚、證、護を求める心になる。そうして、今すぐ我を護り、我を讃めたまう祖先を背に、出て我が念願の成就の永遠の旅に出なければならぬ。

祖先を背に、社会を前に、私はどうしても法蔵のこの「たとえ身を諸の苦毒の中に止くとも、我が行は精進にして、忍びて遂に悔いじ」の偈を我がものとせずにはおられない。

故郷の人として最後。最後！ 何という厳肅だろうぞ。

今日より後、故郷に返り来るも、我が家には煙は立ち上るまい。父母の我を迎えたもうこともあるまい。幾才、幾十才、かくて我が家は廃家となつて雑草に埋れることだろう。

最後。人生は日々が最初である。又日々が最後である。

最後だと思ふ時、如何に呑気にふざけた者も、真面目になる。最後は人生の腐敗をふせぐ最良な機会である。

大正十二年。それは苦しい一年であつた。しかもそれだけ懐しい一年であつた。私の一生になくてならぬ一年だつた。しかもそれさえ最後だ。月日の小車は、廻り廻つて止まる時がない。帰り来らざるか今年。去り行くか十二年。

雪の国

我が故郷は雪の国である。一月二月にもなれば、毎日く、灰色の空から綿のような雪が暗いように降る。人も通わず、風も吹かぬ寂しい夕べ、綿のような雪が見る間に天地を真白にする。積雪満地。天地一白。地上数尺ただ雪である。

戸も開けられず、外にも出られぬ吹雪の日がある。粉のような乾ききつた小さい雪か狂う風にまい上つて、鋭い寒気に、全てを凍らせてしまう。

雪を見れば故郷を憶う。故郷を思えば、雪の景色を連想する。

雪の夜の燧の側、言つただけでもなつかしい。乾いた惜しげなくともいい薪がどつきり炉に投げこまれて、勢いよく燃上る。家内一同が集つて、それに隣の心安い訪問客を加へて、長い夜が御法義の相続に更けてゆく。なつかしいこうした夜、干し柿に番茶をすすりながら、御開山様の御苦勞の話が出る。

祖聖親鸞様が北越のあの寂しい雪の天地を、迷える子のために、恵まれた同胞をたづねて、縁のつながるままに、石を枕に雪の褥、愚禿と徹底して、極重悪人とすすりなきつつ念仏して歩かれた姿こそ、そのままが法蔵の精進、永劫苦行の姿ではないか。

『教行信証』を書き残されたこともありがたい。肉食妻帯の人間生活の上に、弥陀の本願のほんとうを体験して下さったことは万人易行の先駆である。

けれども、我が内にあつて常に我を導きたまう親鸞様は、一文不知の卑賤の我々が炉の側で味わせていただく、乞食僧のように歩んだ親鸞様である。

吹雪の道をじつと見つめてみると、時おり人が通る。粉の中に立つたように、行かず、もどらず、行きなやむその姿を見た時、もしあれが親鸞様であつたらと思つたことがある。

「もしあの道行く人が親鸞様であつたら……」

私の子供心に残っている、こうした、雪の旅の沈黙の聖者、その前には何の議論の用事もない。私の理屈ぬきに、親鸞様に言い知れぬ尊さ、親しきを感じるのには、雪中の親鸞様を思つた時である。

雪については、苦しい恐しい経験の数々を持つた私は、

「念仏称えながら、雪の中に立つた親鸞聖人。」

それを思う時、像なきに呼びかけ、声なきに答えたい気さえする。

親鸞聖人の御一生は決して、世のいわゆる幸福な方ではなかつた。全ての苦惱の中に、地獄のどん底に落ちきつた境地に、南無阿弥陀仏の光に、地獄一定のままを喜ばれたのである。

雪の中の親鸞様、それこそ、聖人の一生の象徴ではあるまいか。冬は寂しい時である。雪の冬である。そして、祖聖を憶う冬である。祖聖、なつかしい。雪の日に、祖聖、尊とや。雪の中を、還り来つて我に生きたまう。私は祖師聖人の尊い一生を、雪を見つつ涙ぐむ。還り来つて念仏の子と共に生きたまう、法蔵の再来。如来の直使、ああなつかしい。雪の日、暮れに近い雪の日は寂しい。

落ちきる境地

信じたら往生するのかわと思った。知つたら往生するのかわと思った。念仏したら往生するのかわと思った。疑いはれたら往生するのかわと思った。善いことをしたら往生するのかわと思った。悪い心では往生出来ないのかわと思った。何も駄目であった。信じて落ちるのであった。知つても助からぬのであった。念仏しても駄目であった。善い事も出来なかった。悪いこともやめられなかった。唯あるものは、堕ちてゆく私のみであった。堕ちてく、落ちるより外なかったのだ。何を出しても、何を探しても、落ちるのだ。落ちるのだ。その落ちる奴をお目あてかと、自力の手でささえても、その手もろ共落ちるのだ。どうしても落ちる。聞けば聞くだけ落ちるのだ。考えれば考えるだけ落ちるのだ。光から暗に、光から暗に、暗から暗に沈む機は、その機をながめて執着する。自分を一切ことごとくみな、飾らずごまかさず見つめた時、「我が身は罪深きあさましき身。」どうしてこの心が頼りにならうぞ。我が身が頼りにならねばどうなるのだ。沈むのだ。何を出しても落ちるのだ。「その落ちる奴がお目あて」と出たがる心も落ちるのだ。

おちる奴がお目あてだと何度、つじつまを合わせても、魂の奥底にどこか承知しないところがある。

その奴こそお救いだと思ひ込んで、どうしても安心が出来ぬ。やはりおちるのだ。

もらいたいのには信心だ安心だと、力めば力むほど疑いが晴れぬ。晴れぬままにお慈悲を仰げと知らされても、お慈悲がわからぬ。いったいこの私はどうなるのです。

おちねばならぬ機が、おちまいとする反動を自力というのだ。

魂の内の大空虚、そのからつぽに説教の法水がそそがれると、その当座こそ充ちたようだが間もない内に消えゆく。五年十年やって来ても、知った、わかつたの高慢の鼻ばかりのんで、心の内は空虚である。

握つて悪いと知りながら、いただいた信心を力にしたい。

称えた称名は報謝だと合点しているようだが、称える称名で心の空虚を埋めたい気がする。

何にも役に立たぬ。それでも何か役に立てたい。

探して尋ねて苦しんでも、知れて来るのはおちる機ばかりだ。

やめよ。全てをやめよ。

おちる者はおちよ。助かろうとする自力を棄てよ。

そこには、ただおちる汝が見えるばかりだ。

おちて見よ、おちて見よ、おちきつて見よ。

その学問を棄てよ。知つたのを棄てよ。そのわかつたのを棄てよ。

極楽参りの根性をやめよ。

仕末のつかぬ腹の中の、こみあげる自己反逆の大軍勢にもつと自由の天地を与えて見よ。聞くも考えるも思うも、唯これ汝の地獄を知らせるばかりである。

はからいをやめよ。自力をやめよ。久遠の本性を直視せよ。

その本性こそ六道輪廻の主、大蛇の形相おそろしき、仏も菩薩も仕末におえぬ地獄一定の奴である。

「かゝる奴めを……」まだ早い。その手が汝を迷わすのだ。

やめよ。自力を信ずる間は暗がある。夜も楽々寝られよう。

何にも手を出すな。大蛇の姿を見つめて見よ。

そのまま、永劫の火に飛びこむのだ。

悪人自覚

念仏は善人の口から出る自己肯定の声ではありません。悪人だと腰を下した者の狡猾な自己修飾の声でもありません。

自分の虚偽に泣きつゝ、より真実にと進む者の生きた一歩々々の行進曲の調律であり、法悦の自然なる湧出であります。

悪人の自覚、悪人だと知ることは、心の垢を知って念々に心の垢を捨て、行くこと
であります。

善人だと気取った時、もう垢を棄てることを忘れたのであります。

「悪人です。悪人ならこそこのままのお救いです。」

言葉の上でなしにこの気持の内をよく内省しないと、とんだ悪魔が巣くつていま
す。悪人だと、ドツサリ坐りこんだ者、そしてその坐りこんだものが本願のお目あて
だ、これが救っていただけなのだと思っていると、それは大変な間違いです。けれど
も今、天下満々として説者も聴者も陥っている有様は実に此であります。

極楽往生と思いの外、地獄行きであります。悪人だと座にドツサリ坐りこむほどの
おそろしいことはありません。

善人だと、自分を買いかぶるのも恐しければ、悪人だと坐りこむのもおそろしいこ
とです。

この二つの型を毀して、堪へ進む者がほんとの不退の念仏行者であります。

ここに言う善人だと気取った人のことを似而非善人と言っておきます。ここに言
う悪人だと腰を下した人を似而非悪人と言っておきます。前者が偽善者ならば、後者
は偽悪者であります。

偽善者

説教師はたいがい偽善者で、今の念仏の同行はたいがい偽悪者であります。虚
偽であることにはどちらとも間違いありません。偽善者と偽悪者と二つ集った社会
には生きた信仰や法悦はありません。宗教も真宗でなくて偽宗が生れます。虚偽で
満足の出来る人には偽宗でけっこうなのであります。真宗とは真実の上に立つた宗
教であります。飾らず偽らず、あるがままの上に立てられたのが真実の教えであり宗
教であります。

偽善者の集団

偽善者が集ると喧嘩がたえないのであります。

一軒の家があります。夫と妻と子と姑の四人暮しであります。四人はそれぞれが
善人だと思っております。偽善者であります。どうか社会から善人の集りで平和な家
庭だと思われようとばかり考えています。

主人は主人で自分が一番世界中のよい夫であり、よい父であり、母に対しては孝行
人だと思っております。妻は妻で自分ほど夫に対しての貞女は外にないと思っていま
す。母としても自分のしていることが一番子供によいと思っております。

姑に対しても自分ほど姑によく仕える嫁はあり得ないと思っております。子供は子
供で自分は孝行人だと思っております。皆善人だと気取った人ばかりの集りでありま
す。「あなたのご家庭は誠に御立派であります。平和なことでもあります。ご結構で
す。」と褒められた時だけは、誠に家庭は輝きます。皆得意になってほんとに平和を

表します。けれども何か一つ間違いがおきた時には、皆、「私は善人だ」という固い城に立てこもりますので、冷たい四人がはなればなれのものになってしまいます。

ある時、戸締りが悪くて盗賊がはいました。朝起きてお金がないので主人は妻を叱りました。主人は昨夜遅く酒宴に招かれて帰って来たのであります。妻は遅くまで起きていました。妻は承知しませぬ。主人に食ってかかります。早く帰って来て下さらないから、私がおそくまで起きていて主人のお帰りを待っていた貞女ぶりに感心が出来ないで、自分を叱ると思います。子供がお金をよくしまっておかないで出しておいたのです。妻は子供を責めたてます。子供は、おばあさんに渡したのだと言います。おばあさんはお金だろうとは思わなかつたと言います。

四人の善人は、それぞれに自分を主張して決して悪人になりませぬ。

褒められた時、平和になるのは、皆が善人だと得意になれる自慢心に満足が出来るからであります。悪いことがおきた時になかなか言い張って一緒になれないのは悪人になることが嫌だからであります。人間がかかる善人である間は、

夫「これほどまでに妻によくしてやるのに何故妻はもつと貞女にならぬか。」

妻「私はあれほど貞淑をつくして夫に仕えるのに何故夫はもつと愛してくれないのだろうか。」

親「あれほど子供を可愛がつて骨身を砕いて育ててやるのに何故子供は孝行をしてくれぬか。」

子「私ほど孝行人はない。自分の希望も何も皆親のためには犠牲にしてしまった。それに親は一度もこれでいいと言ったことがない。何故自分の親は、私の孝に対して鈍感なのだろうか。」

とこのように考えています。一步も進み出ることの出来ない退転の人たちが善人です。

善人の集つた世界はど淋しいものではありません。

善人の集つた世界では、盗賊に金を奪われた過去について、半日でも三日でも議論されてあります。そうして結局が議論して自分の悪名を着まい、罪を他人にぬすぐりつけようといたします。皆がそうでありますから、議論に日が暮れるばかりで何も生れては来ませぬ。

善人ばかりが集りますと、自慢、高慢に鼻持ちがなりませぬ。誰でも人を見たら馬鹿や悪人に見えて来て、自分ばかりが善人に見えます。否、善人に賢人に見せるように苦心してばかりいます。

自分の内はどうでもいいのです。何かしら空虚があつても、そんなことは問題ではありません。他人の忠告などはちつとも受けはいたしませぬ。褒められたらそれ見よがしに高くなるし、くさされたら、しばれて力を失つてすぐけなした者を嫉みます。

善人たちにとつて一番大切な事は世の中からほめられたりくさされたり、持ち上げられたり笑われたりすること、いわゆる毀誉褒貶であります。毀誉褒貶に、七面鳥のように、顔色を変えるのであります。

念仏行者も一度、「我は同行なり」と坐りこんだらそれまでであります。我は教える者なりと構えたらそれまでであります。不退の念仏行者ではなくて偽善者であります。

偽悪者

偽悪者は悪魔であります。地獄行きであります。社会を乱し、国家を危くし、人類の怨敵であります。

悪いままに止る者であります。悪いままをこのままでよいと考える者であります。

悪人正機の御救いを得手勝手にとつた人であります。

涙の枯れた人面獣心の人であります。五逆の徒であります。

真実の一道を失つた者であります。魂の本願のない人であります。

自分一人が損にならねば、どんなことをも厭わぬ人であります。

勉強します

かくて年末は来しました。希望を持って新年を迎えます。永遠に生きる者の一里々々の祝賀門。年末まで奮闘します。勉強します。そうして大きな輝きを明年に見ながら、現実の今日を本当に生きて行きます。

ペンをおいて今朝、故仲野千代香法姉百ヶ日追弔の講演に出発します。